

「運営の仕事は大変だぞ」と、かつて運営を担当されたある先生から脅されていましたが、いったい何が大変なのやら、今になってもさっぱり分からずにいます。運営はとても楽しい仕事です。その中でも、目玉は何と言ってもシンポジウムです。私が世界で最も尊敬する研究者である野矢茂樹先生と、私が世界で最も心の支えにする研究者である西村義樹先生をお招きすることができ、興奮のあまり、遠足を控えた子供のように寝付けない日々が続きました。私が住む三つの世界の間、大きな橋がかかりました。「こんなに立派な橋がかかったよ!」と、みんなに自慢したい気持ちです。

説教じみたことは言いたくありませんが、なんだか最近、若い研究者に元気がないような気がしています。欲がないと言うか、変に物分かりがいいと言うか、目立つのを避けていると言うか、権威におびえていると言うか。そこで、この機会に、最も年齢の若い編集委員から、若い皆さんにメッセージを送りたいと思います。

「あなたのやっていることはフランス語の研究ではない」と、かつてある先生から対話を打ち切るような強い調子で言われました。「私の人生を賭けた研究に対して、この先生はどうしてこんなことを言うのだろう」と、寝ても覚めても、考え続けました。どん底に沈みながら考えるうちに、私の哲学の中で、言語論と他者論が合流しました。そう、この先生と私は、互いに「意味の他者」なんだ。そうして実現できたのが上記のシンポジウム「フランス語学と意味の他者」です。人を傷つける言葉も、そこから逃げずに悩んで悩んで悩みぬけば、立派な橋ができるきっかけになるのです。

私はフランス語が大好きで、たとえ無給でも続けたいと思えるほど、フランス語を教える仕事が好きです。風邪で調子が悪い日でも、悩み事があるときでも、教壇に立てば元気が出ます。前期14コマ後期15コマの非常勤をしていると、「大変ですね」と同情されることがあります。しかし、自分の好きな仕事で食べていけるのは、幸せなことです。同情される日が来るとしたら、それはこの仕事をやめなければならないときです。この幸せを手放したくない、この仕事をやめたくない、という思いが、上記の先生の言葉に正面から立ち向かう原動力となりました。

人生も、世界も、確かにづらいことばかりです。「どうしてこんなことが起きなければならないのだろう。」無意味な問いだと知りつつ、思わずそう問いたくなる悲しい出来事が起き、そのたびに無力感に苛まれます。しかし、ただでさえづらい人生を、自分の手で余計つらくすることはありません。権威におびえて人の言いなりになる人生が幸せか、苦しみを立派な橋に変える人生が幸せか、考えどころです。フランス語を取り巻く状況が厳しいと言われて、ただ悲観的になる人生が幸せか、状況を見極めつつ橋をかける方法を最後の瞬間まで探し求める人生が幸せか、考えどころです。

私の母校の創設者(高額紙幣の人です)が言っています。「独立の気概がない者は、必ず人に頼ることになる。人に頼る者は、必ずその人を恐れることになる。人を恐れる者は、必ずその人間にへつらうようになる。常に人を恐れ、へつらう者は、だんだんとそれに慣れ、面の皮だけがどんどん厚くなり、恥じるべきことを恥じず、論じるべきことを論じず、人を見ればただ卑屈になるばかりとなる。」(『学問のすすめ』(ちくま新書)p.41)

橋の設計者は、他の誰でもなく、皆さん自身です。他人の権威に頼ってはなりません。さもないければ、その権威ある他人と共に、自分も滅びることになります。

独立の気概を持った若い皆さんの手で、色とりどりの個性的な橋がたくさんかけられるのを楽しみにしています。そして、橋をかけたら、遠慮せずに、「こんなに立派な橋がかかったよ!」とみんなに自慢してください。例会はそんな皆さんの自慢の場の一つです。